対談：中山可奈子　×　鳥原学

●街でのスナップ

鳥原：じゃぁ、写真を見ながら話しましょうか。写真はもうずっとやってるんですか？

中山：専門学校に入ってからです。今年卒業したので、二年くらい。一眼レフは高校二年生のときに買って、それはお友達撮ったりとか、そういうのばっかりだったんですけど。
鳥原：なんで写真をやろうと思ったの？

中山：はっきり覚えてないんですけど、元々絵描くのとか好きで、写真も面白そうって思ってるときに、従弟が写真をやってたんで教えてもらって。高校卒業した後の進路を考えてる時に、美容とか服飾とか写真とか色々学校を見てまわったんですけど、体験入学して一番面白かったのが、写真だったんです。

鳥原：入った時からスナップを撮ってるんですか？

中山：始めは、ポートレイトとスナップの違いがわからなくて、ただ撮ってて。それから、街に出て知らない人を撮るっていうことをやってもいいんだって学校に入ってから知って、そういう楽しさみたいなのを感じてから撮り始めました。

鳥原：写真をやってて、一番面白いのはなんですか？

中山：撮影・現像・ネガ選び・プリント、全てがつながってるので一番は無いです。全部が一番です。

鳥原：写真について誰か影響受けた人います？　こういう写真撮ってみたいとか。

中山：いると思います。でも、こういう写真撮りたいと思って撮っても出来上がると違うものになっているし、撮ってるときは頭の中はカラッポで、集中しています。

鳥原：いろんな所に行って撮ってるんですね。大阪とか……。

中山：はい、あと沖縄とか名古屋とか青森とか。

鳥原：撮影地はどういう基準で選んでるんですか？

中山：浅草や鎌倉はやっぱり街並が好きだから、よく行きますね。興味のある場所・人がたくさんい
る所です。沖縄は学校の合宿で行った時に撮ったものです。

鳥原：街並はほとんどわかんないけどね（笑）。

中山：ああ、そうかもしれないですね。その街の雰囲気みたいのが好きで、そこに行って人を見るんです。

鳥原：モノを見て、自分との距離が分かってて、それをちゃんと撮ってるって感じがすごくしたんですけど、そういう瞬発力が高いですよね。撮ろうと思ってシャッター押すまで、すごく早いほうですか？

中山：その時、その時で決まっていません。あっ、と思って撮るときは早いと思います。

鳥原：どういう人に、「あっ」て思う？

中山：みんな違うんでうまく言えないですけど、声をかける人は私が惹かれるものを持ってる人かな？　街へ出て人ごみの中でも、自分の世界をもってるというか、存在感があってパッと目がいく。あとは偶然の出会い、偶然の反応です。

鳥原：そういうものを選んでいく中で明確になってくる、選ぶ基準みたいなものがわかっていれば、教えて欲しいんだけど。

中山：基準は特にありませんが、何か、どことなく古い感じがするものですね。ちょっと昔っぽいと
いうか。

鳥原：うんうん。昭和レトロじゃないけど、時代がすごくこう、今なんだけど昔のものもあるみたいな。

中山：私は、寺山修司の映画をよく見たり、昔の雑貨を集めたり、純喫茶に行ってマッチ集めたりとかしてるんです。そういうのが好きだからかな。撮ってる時はあまり気づかないんですけど、プリントしてみるとそういう作品が多いなと思います。

鳥原：作品タイトルは「風街ブルース」ですけど、なんで「風街」ってつけたんですか？　フォークソングみたい。

中山：目の前の出来事とか、時間の流れとか、感情とかはいつもふわーっと飛んでって忘れちゃう。そんな風みたいに通りすぎてしまう一瞬一瞬を写したいと思ってます。ブルースっていうのは、特にR& Bが好きなわけじゃないんですけどね。

鳥原：雰囲気ですか（笑）。この全身タイツを着て歩いている写真とか、面白いですよね。結局、すごい新しい部分と、それと今言われたような、ちょっと古いものっていうのがうまく画面に入ってるので、街がどういうふうに積み重なって出来てるものなのか、よく分かりますよね。でも、人にカメラ向けるのは、怖くないですか？

中山：たまに。いいのかな？　って思ってしまうと撮れないんです。でも、ほとんど平気です。面白いと思って撮ってる時は怖くないんです。

鳥原：うん。逆にカメラがなくて人の前にバッと立ったりする方が、怖いかもしれませんね。

中山：なんか不安な気持ちになっちゃいますね。

鳥原：ああ、カメラがあった方が不安じゃないんだ。

中山：不安じゃないというか、やっぱり安心します。撮りたいと思う時に撮れるから。

●被写体との関係

鳥原：ずっとモノクロで撮ってるんですか？

中山：学校に入ってからです。

鳥原：今回の作品選考でモノクロで出している方は三割くらいでしたかね。デジタルはまだモノクロより少なくて。何をどう撮ってもいいんですけど、カラーかモノクロかデジタルかでは、やっぱり出てくるものが違いますよね。その中で、モノクロを選んでやっているのはどうして？

中山：色があると、その人の服とか看板の色とか、どうしても色に目がいってしまいますよね。そうじゃなくて、私はやっぱりその人の仕草とか表情とか、その瞬間に起こってる出来事とかを見たくて。それでプリントした時に、そういうのが一番はっきり表現できるモノクロがやりたいって思ってるんですけど。

鳥原：うん。やっぱりモノクロの方が、造形が見えてきますよね。声かけて撮る時もあるんですか？

中山：はい。一人で割と大きく写っているのは、声をかけてます。

鳥原：関係を結ぶのと結ばないということはどうですか？　声かけて撮るのと、かけないのとは違いますか？

中山：声をかける人は、本当は撮りたいだけじゃなくて、話をしてみたいって思う人ですね。でも、声かけたら表情が変わっちゃうとかそういうのもありますけど。声かけた人と関係が出来て、それが続いていくっていう面白い部分もあります。今も、たくさんそういう関係が続いてます。

鳥原：この前、３０年前に撮られたある有名な写真家の写真を、カメラ雑誌の編集者と一緒に見ていて、その写真は家が写ってて、家族が四人並んでるの。で、その写真を使いましょうかって言ったら、編集者が、いや待てよ、肖像権どうなってるんだろうってことになって。３０年前の写真なんだけど、肖像権はずっとあるんです。でも、そんなの確認の取りようないし、撮った時にも取ってないでしょう。だから、今の時代スナップをやる人にとっては、すごい難しくなってきてますよね。

中山：ええ。この間もDMに掲載する写真を選ぶ時に、結構声かけてないのがあるので難しかったです。

鳥原：そうだよね。でも、声かけないで撮ってるのが面白いのにね。こういうことがやれなくなってきて、やっても発表の場が無くなってくるとかあるんだろうね。

●ドキュメンタリーとは？

鳥原：この間の選考会で、中山さんの作品が評価された点は、反応の良さとか、仕上がりが丁寧とかもあるんですけど、一番いい所は、やっぱり「現代」が写っているということですよね。街を歩いてて、普通は群衆って捉えているものが、写真になると一人一人がくっきり出てくるって事が、写真の基本的な面白さだろうし、そこに目をやって撮ってる勘の良さっていうのが、すごくあると思います。ただ実は、僕の中には疑問があったりもするんだけど（笑）。というのも、この方法論は、もう非常に多くの人が、写真学校の学生さんとかもすごくやってて、フォト・ドキュメンタリー「NIPPON」としては、もう一歩踏み込んだ作者の意図や解釈を求めてもいいんじゃないのかと思ったんですよ。だから、中山さんがこれを選んで出してきた理由が、写真の面白さということだけではなくて、もうひとつ、内容の部分においてメッセージや伝えたいことがあるんだろうかって、疑問に思ったんです。

中山：面白いだけで撮って出した訳ではありません。何を見て、何に惹かれて、何故それを撮ったのか。それは現時点では分かりません。人に興味があるとか、いろんな人に出会いたいとか、もっと世界を見てみたいとか言葉は出てきます。でも、それだけではすまされないと思います。これから写真を続けていく中で、自分なりに探求していきたいです。あの、鳥原さんが座談会で言ってたコメントを読んだんですけど、「ちょっと寂しい」っていう。それは、どういうところが寂しいのかなと思ったんですが。

鳥原：別にそれは、作品が寂しいということではなくて、20歳という若さでここまでちゃんと撮れてしまうとこの先どこに行くんだろう、っていう意味なんです。その人の伸びしろがなかなか見えないというか。この方法論で自分のスタイルを作って、ずっとやっていくのは全然いいことなんですよ。ただ、これまで培われてきたドキュメンタリーの土俵があって、戦争が起きてドキュメンタリーブームだと言われている時に、自分のやってるジャンルに対してどう問いかけをしてるのかっていう所が少し見えないから、「新しいドキュメンタリー」を求めた時に、何をこの人は付け加えてくれるんだろうって思ったんです。だからといって違うことやれって言ってるんじゃないですよ。展覧会では、何を見せようと思いますか？

中山：何を見せようとかじゃなく、今ここにある写真を気持ちいっぱいで展示したいです。

鳥原：ドキュメンタリーの展覧会っていわれて、それで応募して、通って、やるわけじゃないですか。ドキュメンタリーってどういうもんだと思う？

中山：私の中では、ポーズをとってもらったり、モデルさんを使ったりして撮った写真ではなくて、素直にこう、そのまま撮るのがドキュメンタリーと思っていたんです。でも今回、選ばれてる人とか見ると、逆に作りこんで撮ってる人もいるんですよね。でも、まだよく分かりません。私はドキュメンタリーとはこんなものだ、とかじゃなくて、展示したいから応募したんです。

鳥原：僕は作り込む作り込まないは別にしておけば、問題は何を伝えたいかだと思ってるんですよ。上手い人はいっぱいいるわけじゃないですか。でも、そういう人ではなくて、なにかもう少し、対象や自分の写真と向き合って、何か伝えようとしている人。撮ってる時は分からないかもしれないけど、出来上がった写真を自分でどう解釈するのか、そして何を伝えるのか、すごい知りたい。その表現をまとめたものが、テーマを設けて自分の作品を整理したこういうポートフォリオだと思うんですよ。そういうことを僕がやるのと中山さんがやるのと違うわけで、その自分の質をどう自覚するかが新しさになっていくわけですよ。展覧会とか写真集に至る過程が、それを掘り出して行く過程になるはずですよね。写真家に言葉はいらないって人もいるけれど、自分のやったことをちゃんと確認しておくのもいい事だと思うので。

中山：はい、それは大事なことですよね。何を伝えたいという事に関しては、伝えたくて路上スナップを撮ってるのとは違うと思います。逆にどう思われたのか知りたいというのが、正直な気持ちです。

●写真を撮る理由

中山：さっき少し話したんですが、昭和っぽい感じがする古いものが好きなんです。撮ってる時は、昔っぽいから撮るとかそこまで意識してないんですけど……。

鳥原：匂いみたいなのに惹かれるって事でしょ？　でも、そういう昔って写真とか映画でしか知らないと思うけど、７０年代の東京と今の東京ってすごく変わったと思う？

中山：変わってると思います。今こう昔の感じをだそうとしても、やっぱり何か違う。今撮った江戸川乱歩の映画とかをみても、やっぱり、昔撮られた映画とは全然違って見えたりとか。

鳥原：その辺が君の写真のヒントだよね。自分が撮った写真も、昔の人が撮った写真とどこか雰囲気が違うってあるわけでしょ。それは、違う人が撮ってるからというわけじゃなくて、吸ってる時代の空気が違うから違うんだってことにもなるのかな？　だけど昔の人のようなものを作ろうとは思わないでしょ？

中山：思わないです。昔っぽいものは単純に好きで集めてるだけなんです。

鳥原：中山さんが写真を撮る理由って、やっぱり写真にして残したいって。形にして見たいんだろうね。見てる現実と写真が撮っちゃう現実のギャップっていうのも楽しいんだよね、きっと。

中山：その面白さはありますね。でも理由なんてわかりません。

鳥原：そこの所が、まずひとつは面白いのと、なんかこうコレクションするの好きみたいだから、溜まっていったら面白いんじゃない？　写真出した方がいいよ。どんどん。これは一つのきっかけだと思うけど、やっぱり、やってて見えてきたことがもの凄く大事だから。で、自分の写真しか自分の事を教えてくれないから。

中山：はい。写真とは何かとか、撮る理由を考えるのも大事だけど、まず撮っていかなきゃと思います。撮りたい気持ちが一番強くて、そういう事をふまえた中で、色々と考えていきたいです。何かちょっと、撮ってる行為は泥棒な感じがします。相手の表情とか、目の前の出来事とかを盗む感じ、写真も泥棒だなって思って。私、相手のために撮っているっていう気持ちは、あんまりないんですよ。ただ自分が撮りたいから。相手に喜んでもらうために撮ってるのとは、またちょっと違うんです。

鳥原：うん。でも、自分も喜んでさ、さらに相手も喜んでくれたら、いいじゃない？　作品が成立するってのは、見る人がいないと成立しない訳だしね。自分がまず喜ぶのはそう。他人が喜んでくれることで社会的にも成立して、あなたも写真家になるわけだから。今、仕事は何してるの？

中山：ホームページに掲載する商品の撮影をしています。

鳥原：結構難しいでしょ？　でも、量をこなす能力は若い頃にしか身につかないから。短いスパンでたくさんのいいもの、程度の揃ったものを作る能力は、若い時にしか、そのスピードは身につかない。そういう技術って絶対必要で、さらに撮るだけじゃ駄目で、発表しないと、次撮れないわけじゃない？　少々お金かかるけど、しょうがないですよね。せっかく選ばれたんですから。あの人どうしてるの？　って言われた時に、やめちゃったよってのが一番つまらないでしょ？

中山：やめないです。

鳥原：ほんとだよ。約束しましょう。その前に僕がやめてるかもしれない（笑）。

２００４年５月２８日（リクルートG7ビル）